

令和 3年 4月 16日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 202080190

氏名 阿部大誠

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 1 派遣先:都市名 大邱 (国名 大韓民国)
- 2 研究課題名 (和文) : 弥生時代における日本列島と朝鮮半島の交流-鉄器の観点から-
- 3 派遣期間: 令和 2年 6月 1日 ~ 令和 3年 4月 10日 (313日間)
- 4 受入機関名・部局名: 慶北大学校
- 5 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先である慶北大学校考古人類学科では、申請時の計画に沿って研究をすることができた。具体的には、大韓民国（以下韓国）の発掘報告書や学術論文など資料の収集を通して、自分が目的とする韓国の鉄器や鉄器生産遺構の事例を集めることができた。新型コロナウイルスの影響により、実際に資料を見て調査する機会がほとんどなかったものの、派遣をすることによって得られた研究成果は大きいものであった。

韓国では、計画の一つであった原三国時代の鉄器を含め、さかのぼって初期鉄器時代の鉄器を集成することができた。また、韓国で刊行されている雑誌の中で、鉄器に関連する論文を同時に収集することができたことも重要な成果の一部である。このように、コロナウイルスが感染拡大を見せる中でも、日本では手に入らない資料を集成し先行研究を検討することができたのは大きな意義であるといえる。これら集成した資料を分析し、反映した研究成果を今後発表していく予定である。

さらに、受け入れ先の先生である朴天秀教授により、韓国の前方後円墳である長鼓峰古墳の発掘調査を見学することができた。日本との関わりが深い古墳の石室を見学することができたのは日韓交流を研究する筆者にとって大きな助けとなった。また、慶北大学校博物館の再整理作業にも参加することができた。5世紀慶州の古墳から出土した鉄製品や青銅製品、金製品を実際に見るだけでなく、実測も行うことで、日本の鉄器との違いや共通性など、鉄からみた日韓の交流について新たな知見を得ることができた。

6 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表等の見通し 研究成果として、韓国の「折り曲げ鉄器」を集成し、日本の事例と比較した論文を発表した。具体的には「韓・日出土の「折り曲げ鉄器」について」(『유라시아欧亜고고考古와 문화 慶北大学校考古人類学科40周年記念論叢』20年12月、p307~337)であり、新たに集成した資料を踏まえ、日本と韓国の事例について検討したものである。このように本プログラムの成果の一部は発表したが、さらなる成果についても日本と韓国で発表する準備を進めている。具体的には、日本では韓国の鉄器の出土状況やその器種組成など、最新の成果が反映されていないため、韓国で集成した鉄器の基礎的な分析を踏まえた研究成果を発表する計画である。そして、朝鮮半島における国家形成過程において鉄器がどの程度影響を及ぼしたのかについて検討することで、日本列島の事例にもフィードバックしていきたいと考えている。

今後の研究計画の方向性 鉄器を集成していく中で、日本列島と朝鮮半島南部との関係性だけでなく、半島北部や東北アジア地域との関係についても検討する必要があることを強く感じた。鉄やその生産技術は中国から半島、さらに日本列島まで伝播したことは当然であるが、実際にその伝播経路や物資の移動はこれら狭い地域では収まらないため、東アジア全体で研究する必要がある。したがって、日韓の鉄を介した交流を明らかにするのは勿論のことであるが、中国東北部や中原地域、西域などといった地域との関連を踏まえて検討しなければならないといえる。

また改めて朴天秀教授と連絡をとり、再度慶北大学校で研究を行う予定である。コロナウイルスの状況で今後が不透明であるが、2年程度在籍し、再度資料の集成に取り掛かるとともに、中国、さらにはシルクロード地域との関係性について詳細かつ広範囲に研究することが目標である。

7 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで、自分の研究が大いに進展したことは勿論であるが、他の研究者とコミュニケーションをとり、自分の意見を述べるという能力も向上した。これは慶北大学校考古人類学科の学生との会話を通して身に付いたことであり、特に韓国語での会話がある程度行えるようになったことも重要な成果である。特に日本と韓国で認識の相違がある用語については、それを誤解なく平易に伝えることがいかに大切であるかを強く実感した。

また、朴天秀教授によるお話や授業の中で、日本や韓国だけという狭い範囲の研究に終始することは人類の歴史を解明する上で不十分であるということを教えていただいた。モノや技術は人とともに移動し、その動きは地球全体に広がるものである。このような知見を得られたことは非常に意義深いことであり、視野を広げて巨視的に研究していくことの必要性を感じる事ができた。さらなる研究を遂行していく上で、本派遣は貴重な財産となるといえる。